慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	黒田禮二、谷島勝太郎共訳 産業自治とギルド社会主義
Sub Title	
Author	加田, 忠臣
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.6 (1920. 6) ,p.866(128)- 869(131)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200600-0128

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

編「工場法の實施に就て」の如く、著者が在官中の實驗に基き、又精密なる數字に徴して立論したるものあり、第五編「國際勞働問題を論ず」る一文の如き、堂々たる大文字とす可く、更に第十一編「社會政策の分岐點」を一讀すれば、吾人は河合氏の意見と內務省や農商務省に横溢する意見との間に、大なる徑庭の存するを認め、寧ろ氏が束縛多き官吏生活を脱することの早かりしことを賀せざるを得ず。余は勞働問題の諸方面に亘りて、最も透徹したる知見を與ふるの資料として、本書を江湖に推稱するを辭せざる者なり。

（堀江歸一）

産業自治と ギルド社會主義

黑田禮二　谷島勝太郎　共譯

芝三田四國町國文堂書店發行　四六版四九〇頁價貳圓八拾錢

ギルド社會主義は其思想の根底を産業界の實際に置いてゐるものであるが五六年以前における其創生時代から現在に至るまで、ギルド社會主義はその最初の地盤を智識階級の間に見出したのである。其結果としてギルド社會主義の原理と文獻とに通じ自らギルド・マンを以つて任ずる人は甚だ少ない。即ちギルド社會主義は學說としては大きく見えた、然し其歸依者の數に至つては甚だ心細い狀態にあるのである。（S. G. Hobson:—National Guilds and The State, 1920. pp. VI—VII）けれどもギルド社會主義に關する文獻は近來大いに增加し實際運動としても遲々ながら其の勢力を認められつゝあるのは世人の廣く知る所である。

而してギルド社會主義を分つて地方ギルドを主張するペンティの一派と國民ギルドを主張するオレーヂ、ホブソン、コールの一派に分ち、更に國民ギルド論者を雜誌「ニュー・エージ」を中心とするホブソン、オレーヂ等と雜誌「ギルド・マン」を中心とするコール、メロア等に分つことが出來る。而して、其主張の明快と其文筆の多産とを以つて最も知らるる人はジー・デ・エッチ・コール其人である。

今こゝに紹介せんとする黑田谷島兩學士共譯の「産業自治とギルド社會主義」はコールの名著 "Self-Government in Industry" 1917 の最新版（第四版千九百十九年）の飜譯である。私は此書がギルド社會主義の梗概として最も手頃のものであると信ずる。ギルド社會主義の提唱者として知らるるエ・アール・オレーヂの著 An Alphabet of Economics 1917 は經濟學の術語について批評し且つ新意義を發見せんとして書かられたもので、其の中には勿論寸鐵人を刺すが如き敏さを藏してはゐるが、そはあまりに斷片的である。シー・デー・ホブソンの National Guilds（この書はオレーヂの名によつて千九百十四年に出版された。）は其の研究の中心を主として賃銀制度に向けてゐる。從つてその他の事項は極めて簡單に取扱はれてゐる。其の他レキットとベシフォーハアの共著 The Meaning of National Guilds 1918 は Quarterly Journal of Economics（と記憶す）に批評した樣に便利な本ではあるけれども、オリヂナリティに缺けた編纂である。そこでギルド社會主義を明確に見渡すにはコールの「産業自治論」を推さなればならないことになると私は信ずる。こゝにおいて私はこのコールの著書の飜譯を心から喜ぶものである。

次に譯書に就いて見やう。時間が許さなかつた爲めに私は譯書全體を通讀することすら出來なかつたのを遺憾とする。けれども其約四分の一位を通讀し原文を照合して見た所によると大した缺陷はない樣である。譯文もよみよい日本

語になつゐ、また忠實な逐語譯のやうである。次に私の氣附いたことを書きたいと思ふ。私の讀んだ部分は谷島學士の邦譯された部分である。

一、譯語が一定してゐないことがある。例へば "Collective bargaining" を「衆團的交渉」（本書三六頁）または「團體的交渉」（六三頁）の如き、"Function" "Functional" を「職分、職分的」また「機能、機能的」の如き、"Pay" を「給金」または「俸給」としたのは何れかに統一して頂く方が讀者の爲めに便利である。

二、Greater Uuionism" を「大なるユニヲニズム」（六四頁）と書くよりも「大勞働組合主義」と書く方が普通であると信ずる。序でにクラフト・ユニヲニズム Ctaft Unionism インダストリアル・ユニヲニズム Industrial Unionism をそのまゝ書かれた所と「職業別」「産業別」と書かれた所がある。これも統一する方が便利である。

三、"Commercialism" を「實利主義」（六七頁）と譯されたがこれは "Utilitarianism" または "Pragmatism" の譯語と混同される恐れがあるから別の譯語にする方がよいと思ふ。"Distributism" を分配主義（一三〇頁）とするよりも分産主義の方が普通のやうに思ふ。

私が氣附いた點はざつとこんなものである。それは勿論如何なる譯書にも不可避的のものである。社會思想に關する英書とさへ云へば、直ちに飜譯され、然も暴譯、誤譯に充つる書籍の發行が非常に流行するときにこの譯者の如き用意を以つて譯筆を振はれたのは私の感謝する所である。

それから私がこの譯書を推す第二の理由はこの書そのものが前にも述べた通り、ギルド社會主義の理論を知るに適してゐることである。簡單な然も不充分な材料によつて書かれたギルド

社會主義に關する紹介を讀む暇があるならば何人もギルド思想の源泉とも云ふべき本書を廻避することは出來ぬ筈である。

私は是等の理由からこの飜譯の出現を喜び重ねてギルド社會主義の研究者の必讀の書として之を推したいと思ふ。終に私は譯者黑田、谷島の兩學士の勞を多とするものである。

（加田忠臣）

圓谷弘著

「我國資本家階級の發達と資本主義的精神」

三田書房發行
四六版二〇六頁定價金二圓

曰く、マルクス、曰くクロポトキン、曰くラツセル、曰く何、曰く何。今や我國思想界は所謂「ランプレヒトの變轉期」に際會して、舶載されたる種々なる學說に惑亂されたやうな恰好である。我國社會學の權威米田博士は曰く。「併し夫れは（勞働運動）諸國に通じて全然同一なる形態に於て行はれて居るのでなく、各國特有の諸般の社會的事情或は條件に應じて、夫れ夫れ特有の形態に於て行はれて居るのである。されば我國の勞働者間に於て、堅實に發達す可き社會思想及び社會運動も、……他方に於て我國特有の社會的事情或は條件に應じて特有の形態をとる可きものである。」（同氏「輓近社會思想の研究」中卷前篇序文）と。實に我國には我國獨特の文化の存すること、敢て特殊事情の宣傳に汲々たる所謂識者の努力を待つ迄もない。米田博士の高弟である畏友圓谷弘君こゝに「我國特種文化を究明しない傾きの少くない。」（本書序文）ことを慨して、「此の欠陷を滿す可く」、本書一卷を公にされた。氏は先に史學を攻究し、更に社會學を極